
S S S 集 (シリアスもシュールもそれとなく沢山書いていく集)

マグロ頭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

SSS集（シリアスもシニールもそれとなく沢山書いていく集）

【コード】

N0295B

【作者名】

マグロ頭

【あらすじ】

短編小説をちょこちょこ増やしていくシリーズ。テーマは季節たぶん。ジャンルも沢山書いていくつもりです。

雨打つガラスの内側（前書き）

今回は文学っぽいと思う。

SSS集（シリアスもシュールもそれとなく沢山書いていく集）

雨打つガラスの内側

午後から青空を覆い始めた雲は、ぼくたちが家路につこうした頃には空一面に広がる大きな大きな黒雲の塊へとその姿を変えていた。秋の冷たい雨がアスファルトを濡らしていく。ぼくはそんな外の景色をロビーのソファから眺めていた。このままじゃ、明日風邪を引くかもしれない。

いつの間にかソファの向かいに彼女が座っていた。この大学にいるぼくの唯一の知り合いで、幼馴染み。昔からのかわいいと持てはやされているが、ぼくが一番の天敵だ。

「あなた、傘は？」
ほらきた。

彼女はぼくの事を良く知っている。昔からの付き合いだから、癖から性格、好きな女の子のタイプまで何でも知ってるんだ。だから、ぼくの抜けてるところを鋭く探し当て、的確に針でつついてくる。案の定、傘を忘れたことを告げると、

「バカじゃないの？」
と今日十回目の台詞を、十回とも同じ人から言われた。そんな事分かってるのに、誰かに改めて言われると少し傷つく。ぼくの心はガラスでできているのに、彼女はそんな事もお構い無しだ。
「バカじゃないよ……」

ぼくは力なく返事した。そもそも、今から雨の中を走って帰らないと行けない事を目の前にして、ぼくはもはや落ち込んでいたんだ。それなのに彼女ときたら。分かっていたのに言ったに違いない。この性悪め。

でも、ぼくか傘を忘れたのには原因がある。朝目覚めてから何かちよつとした事を忘れてて、まるで喉に突き刺さった小骨のように気になっていたんだ。傘を忘れてしまった原因のそれは、今もモヤモヤと渦を巻いている。

まったく。そう言うってから彼女は呆れ果ててこう続けた。

「今日は降るって朝電話したでしょう」

渦が突然動きを止めた。

そうだった。朝、ねぼけ眼のぼくのところに、彼女は電話をくれたんだ。

「今日は晴れてるけど、午後から雨が降るよ」

って。そうか。そうだったんだ。忘れていた事はこの事だったんだ。

うん？ それじゃあ彼女のせいで傘を忘れたのか？

そんな事を口走ったら、今日十一回目の台詞を同じ人からまた言われた。

「バカじゃないの？」

SSS集(シリアスもシュールもそれとなく沢山書いていく集)

響く足音(前書き)

今回はホラーかも。

響く足音

冬はもうそこにある。

黄色が世界を包む銀杏並木を歩きながら、ふとそんな事を思った。あともう少ししたら、この景色も寂しくなってしまうのだろうか。

何時もの時間はとつくに過ぎた。

毎年十月三十日。

彼女はこの銀杏並木に現れる。毎年変わらない。美しい黒髪を風になびかせながら、大きな白のコートをはおり、ハイヒールの音を高らかにかもしながら歩く彼女を、私はベンチに腰を掛けて待つ。時間は絶えず流れているが、今この時この場所にだけは無限の瞬間が止まっている。この今だけ私は現実と切り離れる事が出来るのだ。

カツン。ハイヒールの音が響く。彼女だ。私は瞬時にそう判断した。路上に大量に降り積もった銀杏の葉の上を、まるで真夜中の病棟を歩くナースのように音をたてて歩く事の出来る人物は彼女以外有り得ないのだ。

カツン。再び響く彼女の足音。私は何処に彼女がいるのか気になつてしまつて、辺りをキョロキョロと見渡す。だが、視界に入るのは重なり合う銀杏の黄色のみ。肝心の彼女の姿は何処にもない。

カツン。三度響く彼女の足音。一步目より、二歩目。二歩目よりも三歩目。足音は徐々に近付いてくる。私は心踊つた。と同時に、どうしようもない焦りとも不安ともとれるものに教われた。彼女は確に近付いている。しかし、その姿が見えないのだ。とうとう私も常人と同じ様に彼女を認識出来なくなつてしまったのだろうか。そんなのは嫌だ。私は彼女に選ばれた存在なのだ。今日この日にだけ現れる、見えない彼女に。

カツン。四度目の足音。かなり近くで聞こえた。彼女は何処だ。辺りを見回す。姿はない。くそつ、何処だ。何処だ何処だ何処だ！焦り、我を失つた私はベンチから立ち上がってしまった。前後左

右、全てを見渡す。視界に入るのは世界を埋める銀杏の黄色以外何も無い。私は叫びたくなかった。どうしようもない焦りと不安と、彼女を見付ける事の出来ない私への苛立ちが、混ざり合い空気の塊となつて体外へと出ようとしたのだ。

とその時、私に後ろから何かを抱きついてきた。軽く冷たく、しかし確な存在感を持つ何かが首にまとわりついた。私は首に巻き付きいたそれを見た。異常なまでに青白い腕。私は首を捻って後ろを見る。同時に笑顔がこぼれた。よかった。ようやく逢えた。

あつたのは面。

凹凸のない陶器のような青白い面が輪郭の形をしていた。

彼女がそこにいた。

今までにないくらい近くに彼女がいた。

彼女が平面の顔を私の顔に近付ける。

キスのつもりだろうか。私はそれに答える。同時に私はそこに飲み込まれ始めた。頭からズルズルと、顔に引きずり込まれていく。雷のような快感が私の意識を奪っていった。消えていく私の意識を満たしていたのは、狂喜にも似た歓喜。彼女と同化する事に私は震えたのだ。消えていく私。顔に靴が飲み込まれた。

後に、銀杏並木にハイヒールの音が響く事はなくなったという。

ずるずる(前書き)

ズル休みしました。何か不思議な一日です。季節は一応秋で。

するする

意味の無い事を、意味も無くやってしまった。

現在、午後一時を少し過ぎました。

みんなは学校で眠い眠い五限目の古典の授業を受けている。私は、家で布団にくるまっている。何だかとっても面倒臭くなっている。私のだ。朝起きたら、もう八時で、いくら急いでも一限目には間に合うけど、遅刻扱いになっちゃってしまっ、そんな時間だったのだ。だから面倒臭くなっちゃって、全てを投げ捨てて、再び夢の世界に落ちていった。

正午、寮のオバサンが私の部屋の扉を叩いた。どうしたの、と聞かれたから、何かダルくて、と答えた。オバサンは、そりゃ風邪だね。昼御飯あるから食べなさい、って言うてくれた。

……オバサン、違うよ。私、ただダルいだけだよ。風邪何かじゃない。面倒臭くてふて寝したんだよ。ズル休みなんだよ。

想いは喉まで膨らんで、でも結局出てくることはなかった。

そして今、私はボーツと部屋を眺めてる。昼に出たレトルトカレーを二杯も食べて、部屋に戻ってきた。ごちゃごちゃ服が散乱した六畳の自室。部屋が汚いと心も荒れるらしい。私の場合はどうなのだろう。部屋が汚いから、今日学校を休んだのだろうか。

理由なんて無いって事に、ずいぶん前から気付いていたくせに、馬鹿みたいに無意味な思考が巡り回る。ホントはこの状態に酔っているだけなのかもしれない。……そうだとしたら、私は今この世で最もカッコ悪い人たちの中の一人だろう。

むなしい。空しい。虚しい。

空っぽの虚しさだから涙すら流れない。私は空気に溶けてしまったように、時間の流れに身をゆだねる。そうすることが今日の私の使命と信じて。そうしないと、私の存在意義が無くなってしまっ気がするから。この瞬間が、日常から外れた今日が、とても新鮮で大

切に思えるから。

私は、どん底まで愚かで、至高まで最高なんだと思う。今この時だから感じられたこの気持。日常になっっていないから感じられる解放感。ちよつとの罪悪感……。どれもこれも、日常から逃げた代償で、今しかない宝物。少し真面目すぎる気がするけど、それでもいいと思った。

外には冷たい雨が降る。

ものしりじいさん

あるところに、大層ものしりなじいさんと、その妻であるばあさんがいました。

ある日じいさんはばあさんに言いました。

「ばあさん、わしは何でも知つとる。例えばなぜ雲ができるのかとか、なぜ地震は起きるのかとか、とにかく何でも知つとるんじゃ」

そうしてじいさんは自慢げに胸を張りました。そして目を閉じると、まるで何も知らない近所のガキンチョに教えを説くような口ぶりではあさんに言いました。

「だからな、ばあさん。何か分からない事があつたら、わしに尋ねなさい。例えどれだけ不思議な事でも、チヨチヨイと答えを教えてあげるから」

それだけ言うと、じいさんは座っていた縁側から居間へ戻りました。この頃急に冷えてきた外気に、今までずっと浸かっていたので体が冷えてしまったのです。

居間に戻るとじいさんは迷わずコタツに潜り込みました。じわじわと足先から温かさが染み込んでいきます。幸せが体一杯に注がれていくようです。

暫くそうしていると、ばあさんも居間に入ってきました。そしてコタツに入るなり、開口一番、こんな事を聞いてきました。

「じいさん、じいさん。先程、何でも尋ねなさいと仰ってましたね。実は私、この頃不思議でならない事があるんですよ」

じいさんは、ああ、と言いました。

「ええ、ええ。じいさんも分かつてると思うのですが、私はここにいるはずがないのです。なんせ私は一昨日死んだばかりなんですもの。なのにどうしてここにいますのでしょうか」

じいさんは困りました。確にはあさんは一昨日ポックリと死んでしまったのです。突然の心臓発作でしたから、じいさんは何もでき

なくて、悲しみに暮れていました。

ところが、今朝じいさんは夢を見ました。ばあさんがとても大きな存在によって生き返されるといった内容の夢でした。驚き、ハツと目を醒ましたじいさんは、居ても立ってもいられなくなって、玄関まで急ぐと、思いきって扉を開け放したのです。そこには生前のばあさんがキョトンとした顔で立っていました。

そんなばあさんが自分が生き返った事を不思議に思っている。今までほとんど大切にしていなかったばあさんに対してした初めての優しさが、このような形で牙を向いてくるとは思いもしていませんでした。

じいさんは答えに困りましたが、やっとの事で答えを見付だしました。

「わしがお前を強く思ったから……。こんなんじゃ駄目かね」

少し頬を赤らめて、恥ずかしそうに鼻の頭を掻くじいさんを見て、ばあさんは優しく微笑みました。

「滅相ありません。十分すぎますよ」

二人の間には優しい絆があったのでした。

志考

「あなたはだあれ？」

暗い暗い、真つ暗闇の光の中で、幼いその子はぼくに聞いてきた。

「あなたはだあれ？ どうしてここにいるの？」

ぼくはぼくです。他の何者でもない、ぼくです。あなたは誰ですか？

「あなたはだあれ？ どうしてここにいるの？」

ぼくはぼくです。ぼくはぼくだから、ここにいます。いえ、ここにいますのがぼくで、そのぼくがぼくかもしれません。

「あなたはだあれ？ どうしてここにいるの？」

はあ……。なあ、君はどう思う。君は一体誰なんだろうか。なぜ君はここにいるのだろうか。なあ、答えてくれないか。彼女に答えているうちに、ぼくはぼくである事を失ってしまいそうなんだ。だから、その前に君の存在をはっきりさせておきたいんだ。

「俺はお前の光だ。お前の鏡であって、全くの正反対。対であるが、決して共に在ることは許されない者だよ」

そうか、わかった。ぼくは君の光なんだね。わかったよ。理解した。ああ、これでようやくぼくは解放される。

「駄目だよ。君は君なんですよ？ 一体何から解放されようとしているんだい？ 君は君である限り、君からは解放されはしないんだよ？」

そうなのか？ ぼくは解放されないのか？ この暖かな鎖や冷たい掌を全てはねのければ、自由に、意識からの自由を手に入れる事が出来るんじゃないのか？

「ばつかじゃないの？ あんたがいるなら、あんたはあんたから逃げられる訳がないじゃない。もしかして、そんな事が出来るとでも思ってたわけ？ あっはっはっ！ 馬鹿ねあんた。馬鹿すぎて何も出来ないじゃない」

で、でも、ぼくがぼくである事を止める事が出来たなら、ぼくは逃げられるんだろう？ だってそうじゃないか。ぼくがいなくなればぼくの意識は消えて、何もなくなるのだから。

「理論上ではな。だが考えてもみたまえ。君は君が君でなくなる事を、君が君でなくなつた後を感知する事が出来るかね。そうさ、出来ない。全く不可能なのだよ。それにだね、今の君を形作っているのは、何も君自身だけではないのだよ」

それは一体どういう事なのだろう。今感じるこの気持は、紛れもなくぼくだけの気持だし、この気持を産み出すのも他でもない、ぼく自身しかいないんじゃないのか。

「そんな悲しい事をいわないでよ。君の気持を作り出すのは確かに君自身だけど、その心を形作っているのは私たちとの関わり大きいんだよ。君は、いえ、どんな人もなかなかその事には気付けないけど、君という心の中には、いろんな誰かが住み着いているんだよ。例えばぼら、私たちがみたいに」

いや、でも君たちは自身から言つてたじゃないか。自分たちは君の分身だよって。それはつまり君たちもぼくであるって事じゃないのか？

「あなたは根本的な間違いをしているようです。確かに私たちはあなたの分身に違いありません。しかし聞こえるでしょう。私たちの声の違いが。そこから想像できる人物の違いが。私たちはあなたの分身です。しかしそれはあなたという鏡に写つた他者の虚像でしかないのです。言わばあなたが感じているあの人の雰囲気、性格、新密度の現れなのです」

わかんないよ。わかんないよ。わかんない！ ぼくは今までで君たちをぼくとして認識してきたんだ。それなのに君たちはぼくであつてぼくじゃないという。じゃあ、今いる君たちは何なんだ。ここにいるぼくって何なんだよ！

「そんなん決まつてんじゃないかねえか。お前が考えてるまんまだよ。今あるお前は、決してお前だけの意思があるわけじゃなくて、いろんな

な人の集合体なんだ。まあ、俺なんかは違ったりするんだけどな。でも、今、お前はお前の中でお前自信を感じている。そこで感じたお前の姿こそ、ここでの真実だ。まあ、真理とはまた違うんだけどな」

「ぼくはぼくであってぼくじゃない……。そういう事なんだろう。でも、じゃあぼくは何から自由になりたかったんだよ。こんなに「ちやこちやした世界から逃げ出したくて、自由を望んだのに。」

「その自由の先に、お主の望むものはあったのじゃろうか？ お主ははなから何も得られない事を知っていたのではないかの？ むろん今、わしが話す内容も全てじゃ。だからここから一気に話をはしよるぞ。お主は自由など望んでおらんだのではないか？」

「はっ、ぼくが自由を望んでいなかったのではないのかだって。馬鹿にするよ。そんな事始めっから分かっているくせに。」

「ええ、分かっているわん。でもね、こういう事はあなたに訪ねてからじゃないといけない事になってるのん。そのところをわかってちょうだい」

「つまりは、ぼく自身が全ての答えなんだろう？ はあ。全くとんでもない連中だよ。ぼくの中でも自我を持ち、対話をしてくるなんて「それだけおもわれているのよ」

「だね。じゃあそろそろ目を覚まそうと思つよ。きつと今まで見た事がない朝日に出会えるだろうから。」

「最後に」

「何だい？」

「俺を」

「僕を」

「あたしを」

「私を」

「わたしを」

「私を」

「俺を」

「わしを」

「あたしを」

「「よろしくね」

うん。わかった。じゃあね。

「あなたはだあれ？」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0295b/>

SSS集(シリアスもシュールもそれとなく沢山書いていく集)

2008年11月7日06時35分発行